

# 試される

# 民主主義

イラク戦争後の中東

## 特集にあたって

中東あるいはイラクという対象地域をはつきりと掴むことの必要はいまや日本人全体の切実なる問題である。イラク戦争という経験は、とりわけイラクという対象地域について明らかにされていない部分があまりに多かつたことを痛感させた。

中東という対象地域を余すことなく正確に把握することは至難なことであろう。しかし、中東を正確に理解するためには局部的ではなく全体的に把握すること、動きつつあるままに捉えることが必要であると思われる。

日本はイラクに自衛隊を派遣することを決定した。もちろん、復興支援が大義名分であるとしても、これは第二次世界大戦以来堅持してきた日本の国防政策を大きく転換するものである。しかし、その歴史的な決定は中東あるいはイラクの現状を総合的に把握した上でなされたものではなかった。日米同盟から導き出された予め設定された結論であった。

じつは冒頭に掲げた一節は、一九三七年の日中戦争開始から二年後に出版された尾崎秀実『現代

「支那論」(岩波新書、一九三九年)の「自序」からの「本歌取り」である。「中東という対象地域」

を「支那の正体」に、「イラク戦争という経験」を「二年間の戦争の経験」に代入すれば、若干の表現と仮名遣いを除いて、ほぼ原文が復元される。

尾崎は続ける。すなわち、「日支抗争の嵐の中に日本人の支那に対する理解も亦否応無しに深められつつある。身命を抛つて血みどろの戦を大陸に展開しつつある幾十百万の日本の若者たちが大陸からその身をもって得た理解を提げて帰り来る時に日本に於ける現代支那論は一層の高き水準に進むであろう。支那はたしかにその相貌を既に変じつつある。大陸出征の若人たちによって新しい現代支那論が、現実築き上げられ、形となって現れる日を我々は期待するのである」(『現代支那論』二頁)。

アメリカの地域研究は第二次世界大戦を遂行する中で敵国研究としてその産声をあげた。もちろん、日本での地域研究はアメリカのような戦略研究としてではない基礎的な臨地研究として展開してきた。尾崎の指摘する戦場から生まれる現代支

那論の「一層の高き水準」とはいかなるものを意味するのであろうか。

本特集は地域研究企画交流センターが二〇〇三年五月一七日に大阪の千里中央ライフサイエンスセンターにおいて開催したワークショップ「試される「民主主義」——イラク戦争後の中東」に基づいている。本特集には同ワークショップに参加したパネリストに執筆をお願いした。

ワークショップが開催された二〇〇三年五月中旬はバグダードが陥落し、サダム・フセイン政権が崩壊して一か月後のことであった。このワークショップ開催後しばらくしてからイラク情勢は一気に流動化していった。すなわち、占領軍に対する武力抵抗が激化していった。それに伴って米英軍ばかりではなく、国連をはじめとする国際機関の関係者、軍を派遣した国々の兵士や民間人までも攻撃対象になっていく。日本の外交官二人が犠牲になったことも記憶に新しい。

イラクの現状は「民主主義」を語るにはあまりにも悲惨である。

(白杵陽)